わたしの聖ジハード戦

女性が働くということ

連載202

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

懐かしきベトナムに思うこと

日本は、移民政策については極めて慎重な国だ。これだけ超高齢・少子社会になっても、依然として移民という言葉は使わず、頑固に外国人労働者と言い続けている。

移民とは呼ばないにしろ、この春から東南アジア系の若い人をあちこちで目にすることが急激に増えた。特にコンビニやスーパーなどの小売業に多い。彼らは、初めのうちはたどたどしい言葉で対応しているが、瞬く間に日本語をたくみにあやつるようになっていく。実に様々な国の人を目にするが、その中でベトナムから来た人が目に留まると、私はいつでもある人を思い出してしまう。

かれこれ25年も前になるだろうか。仕事で台湾を訪れた際に、そのままひとりでベトナムに向かったことがある。当時すでに日本の大手企業の工場がベトナムにあったが、観光地としてはメジャーではなく、周囲にもベトナムに行ったことのある人はいなかった。

空港は、信じられないほど未整備で、暗かった。出口には大勢の人がひしめき合い、飛行機から降りてくる異国の人々を珍しそうに眺めていたものだ。

その時、ガイド兼通訳として出会ったのがファンさんという男性だった。年齢は30代後半だったと思う。アジア人の割に背が高く、ちょっとインテリっぽくて笑顔がよく似合った。日本語は驚くほどうまく、コミュニケーションには全く困らなかった。聞けば、ラジオで日本語を勉強したという。日本では、10年近く学校

で英語を学んでも、いっこうに英語を話せない人が多いというのに、彼らの学習力や言語能力には本当に驚かされる。

ファンさんは、日本語だけでなく、色々な事に精通していて日本のことも良く知っていた。バイクの荷台に乗せてもらったり、現地の人しか行かないコーヒーショップに連れて行ってくれたりした。コクのあるベトナムコーヒーを味わったのも、それが最初だった。歳が近かったせいもあって、話も弾んだ。そんなに日本語が上手なら、日本に来てもっと勉強するか仕事に就くか、すればいいのに。そんな能天気な事を口走った時だった。ファンさんは、笑い顔から一転、妙に悲しげな顔をして黙ってしまった。私はハッとした。当時、ベトナムから日本に来ることなど、夢のまた夢だった。長く続いたベトナム戦争の後遺症が残るなか、ひとつの独立した国としてやっとヨチヨチ歩きを始めた頃だ。一般庶民が外国へ行くなど考えもしない時代だったのだ。案の定、ファンさんは、日本どころかベトナムから出たこともないし、今後も外国へ行くことはないだろうと言った。

その時のファンさんの目は、深いあきらめと悲哀に満ちていた。こんなに才能豊かな人が夢を持てないでいる、当時のベトナムはまだまだ貧しい国だったのだ。若者が未来を語れない国は残酷だと思わずにはいられなかった。

しかし、時代は変わった。今やベトナムからたくさんの留学生や労働者がやって来る。親日派が多いせいか、ベトナムの若者は引っ張りだこだ。やっと若い人が夢に向かって生きることができる、そんな国になったことをしみじみと嬉しく思う。

才能と夢のある若者は、皆で支えていかなければいけない。意気揚々と日本にやって来る彼らを真正面から迎える度量の広さをきちんとした形で示すこと、それが今、日本に求められているのではないだろうか。

イラスト・伊藤栄章
タイトル・浅井健史